

## 南の海の宝物



株式会社東日本放送  
代表取締役社長

佐藤吉雄

この夏で250本を超えました。空けた酒瓶の数ではありません。スキューバダイビングの潜水回数です。空気のタンクを背負うので「本」で数えます。

塩竈の生まれで泳ぎは海で覚えた私ですが、初めてのダイビングは1987年、29歳のときでした。沖縄のコバルトブルーの海は、中に入ればどこまでも透明で、差し込む陽光に青や黄色のサンゴがきらめき、極彩色の魚たちが逃げもせず群れ泳ぎます。水中で呼吸し、重力から解放される異次元の自由もありました。すっかり魅了されて翌年、石垣島でライセンスを取得し、それからは、夏に時間が許せば、南の海に行くようになりました。

朝日新聞の記者だったので、取材にも活きました。そもそも沖縄との縁は在日米軍を担当したことに始まります。一番好きな海は、本島に近い慶良間諸島です。ダイバーが憧れる珊瑚礁の小島は、沖縄戦で米軍が最初に上陸し、集団自決の悲劇を生んだ地です。

ここに「機関砲」と呼ばれたポイントがありました。水深20メートルほどの岩場に旧日本軍の砲があり、そばに葉莖が転がっていました。「鉄の暴風」といわれた沖縄戦を象徴するような景観でした。しかし、水中に砲が正立しているのは不自然でもありました。取材を重ねると、引き上げた砲を後で据え付けたことがわかりました。偽りの「戦跡ポイント」を海中に作ったのです。衝撃を受けた私は、島民の方々に戦中、戦後の体験を聞かせていただき、水中写真とともに記事にしました。そこには徹底的な破壊と幾多の死のあと、同じ場所で生きる人々の悲しみ、苦しみと現実が交錯していました。私はその後長く、沖縄の問題を担当することとなりました。



沖縄・慶良間諸島で2016年8月、筆者撮影

南の海は、地球温暖化の生き証人でもあります。例えばサンゴの白化現象です。海水温が異常に上がると、光合成する褐虫藻がサンゴから逃げ出して、真っ白な骨格だけになり、やがて黒く枯死して荒れ野のようになります。大規模な白化を沖縄で最初に目撃したのは97年夏でした。地球規模で二酸化炭素を抑制する京都議定書の採択は4ヶ月後のことです。水温の上昇とともにサンゴは北上し、今や房総半島でも見られますが、沖縄では生息域が縮小し続け、海が悲鳴を上げています。

でも、水の中でこんな難しいことを考えているわけではありません。いつも海に入れば心は無になり、まばゆい光と色に包まれた無数の生き物たちが迎えてくれます。年々、自由な時間が少なくなり、体力も心配になってきました。来年、また行けるといいな。